

生徒の間違い、戸惑いから学ぶ

齋藤 貴子

1. はじめに

もう25年も前のことだが、今でも鮮明に心に残る、教育にまがりなりにも携わる私の姿勢の根底となった出来事がある。

中学校を卒業し、それぞれが自分の道を歩み始めて数か月過ぎたある日のことだった。社会人1年生として遠方へ修行に行った友達から、近況報告を兼ねた一通の手紙を受け取った。故郷を遠く離れ、慣れない地での寂しさから、同級生の多くに出されたものの一つだった。中学時代を共に過ごしたが、その友達の書いた文章を読むのはその時が初めてだった。ショックだった。助詞として、お、を、は、わが雑然と使われていた。「知っていて当然」そんな思いでこれまで文字を使っていたが、実はそうではなかった、自分の知っている世界は非常に狭い、ことをその時初めて実感した。

学校現場で英語を教える立場になって、この経験は益々意味のあるものになった。英語を苦手とする生徒、どうしても好きになれない生徒、理解に時間がかかる生徒、教師の説明を予想もしない間違っただけで覚える生徒、こうした生徒が少しでも減る工夫を教師は絶えず心がけていなければならないことを痛感してきた。また、根本に流れる、人と人とのコミュニケーション能力の育成を目的とする英語学習であることを踏まえ、現在の自分の説明・指導が、

- (1) 生徒が将来にわたって英語学習を続ける上で誤解を生じることなく受け取れるものか
- (2) 簡潔かつ分かりやすいものか
- (3) 系統立っているか
- (4) 生徒が成就感を覚えるか
- (5) 生徒が自己を確立する手助けとなっているか
- (6) ことばの使い方や人の接し方を考慮された、

人権尊重を具体的に伝えるものになっているかを考え何手か先を見越しながら授業を進めていく必要を感じてきた。特に(5)(6)に関しては、教師は何をすればよいか、生徒は何をどのように学ばばよいかを具体的に探る必要がある。

英語学習における思いがけない疑問やつまずきを、

私は教える立場となって初めて、生徒たちから教えられた。「知っていて当然」の思いが打ち砕かれたかつての出来事を胸に、先を見越す手を増やし続けられたらと思う。さて、私は今、何手先を読んで授業を行っているといえるだろうか。

最後に、手紙をくれた友達の名誉のために付け加えておくが、現在は社会情勢に関心を持ち、福利厚生面の向上のために活躍中である。

I. 生徒の間違いや戸惑いをまとめるにあたって

- (1) 現任校を含め、これまでに勤務した12校（小学校2 / 中学校8 / 高等学校2：講師としての勤務を含む）での経験から中学校の英語学習で教師が胸に留めておくべきと思われる点を挙げる。
- (2) これまで中学校で使用したSunshine（開隆堂）とNew Horizon（東京書籍）の教科書を使って学習を進めるときに生徒から発せられた質問、指導上気付いた点、定期テスト等で見られた生徒のつまずきを項目別に挙げる。
- (3) ALT訪問時の生徒たちや私自身を始めとする日本人教師の反応から、文化の異なる人と接する上で考えさせられたことを挙げる。

II. 生徒が間違いやすく、戸惑いを覚えやすい場面

(1) 音声

① 語尾の発音

初期の段階で語尾の[k][m][n][t]等の、談話の中では飲み込まれてしまう音が教師の発音で聞き取れていないと、oral communicationの場では省略して覚えてしまう。

② 日本語にない音

子音のf, v, r, l, thは聞き取りにくく、発音もすぐにできない。日本語の音で代用してしまいがちである。

③ 日本語化した音

cat ⇨ キャット

see/sea ⇨ シー

two/too ⇨ ツー

birthday ⇨ パースデイ

team ⇨ チーム

show ⇨ ショー

カタカナで表された音をそのまま英語の発音とする。

④ アクセントと音の高低

強く発音する部分を、音程を高く発音することで代用する。

Japanese/volunteer

(2) つづり

① アルファベットの学習

大文字から習うと、使用頻度が圧倒的に多い小文字を最後まで覚え切れない生徒が出てくる。

また、bとdの区別に時間がかかる。

② 単語の書き方

余白が狭いと、何度注意しても単語を途中で切って、その続きを下の段に書いたり、縦に書いたりする。

③ 筆記体

以下の、それぞれのアルファベットの表記が曖昧になりがちである。

小文字…a, o, u/b, f/h, k/m, n/
r, s/u, v/v, w

大文字…F, T/G, S/H, K/P, R/U, V

小文字と大文字…l, I

④ 紙面の都合で-(ハイフン)を使って分割された単語

なぜこのような形で表されているのか見当が立たない。この単語を書く時はいつも-を使用する。

⑤ 自分の名前や固有名詞の書き方

小学校でのローマ字指導が徹底していないと、子音と母音の関係や、大文字による表記が分からず、自分の名前や住所が書けるようになるまでにかなりの時間を要する。

(3) 文法

① 自動詞と他動詞の区別

自動詞と他動詞の存在、使い方の違いを知らなため、I visited to Tokyo. と表現する。

② (e)sの4つの発音とその用法

複数形…pens/books/cats/classes (cities)

動詞…loves/likes/sits/washes (studies),
goes ⇨ 「ゴウイズ」になる

所有…Tom's/Tom's father's/hers

それぞれの、音の区別、用法の違いが混乱する。

③ someとanyとmanyの区別

この区別ができにくい。中でも、発音が似ているanyとmanyを混同してしまう。

④ 前置詞の後にくる人称代名詞

This is a present for him.

This is a present for his mother.

前置詞の後にくる人称代名詞の目的格の説明と練習だけだと、This is a present for him

mother. と思いつむ。

⑤ 所有格+名詞の変化

所有格+名詞の場合の変化が分からない。例えば「私の父のもの」の変化はどうなるか応用がきかない。

⑥ 冠詞と所有代名詞

This is a my pen. と誤って表現したり、There is a book on the my desk. のように、前置詞+所有代名詞+名詞の表現に慣れるのに時間がかかる。

⑦ always, usually, often, sometimes

頻度の関係や、Be動詞と一般動詞それぞれと共に表現する場合の違いを混乱する。

⑧ more/the most と better/the best

They're the grope I love the most. と This is the song I like the best. では、どう違うのか。more/the most と better/the best の使い方が曖昧。

⑨ 現在完了形

「持っている、飼っている」の表現で習ってきたhave, hasの全く違った使い方の理解に時間がかかる。完了形の疑問文、否定文と「持っている、飼っている」のそれとの区別がつかない。I haven't a pet. や Tom doesn't have been sick. といった表現をする。また、現在完了形の用法に関しては、教師自身にも学習の余地が残されていると考える。I was invited to Jane's birthday party this Sunday. と I have been invited to Jane's birthday party this Sunday. の違いを把握し、的確に使えることが必要と考える。

(4) 表現

① 疑問文や否定文の表現の仕方

Be動詞や助動詞がある場合と一般動詞がある場合、また現在形、過去形といった時制の注意点が分からない。Tom wasn't go to school yesterday. や Tom didn't can catch the train. といった表現をする。

② 疑問文の答え方

When is your birthday?

When do you usually listen to the radio?

When does your sister play tennis?

When did your brothers go to Osaka?

It is~で答えることの多かった初期の印象が強く、主語と動詞の関係を把握できなくなる。

③ 疑問詞で始まる疑問文の応用

What sports do you like?

What kind of food do you like?

Which season do you like the best?

練習で慣れた文は、What do you～?が多く、疑問詞+名詞の疑問文が作れない。What do you like sports?や Which do you like the best season?といった表現をする。

④ 後置修飾

- ア 前置詞
- イ 形容詞用法の不定詞
- ウ 現在分詞
- エ 過去分詞
- オ 目的語のない文章
- カ 関係代名詞

後置修飾の用法になじまず、慣れるのに時間がかかる。ア～カのそれぞれの用法が曖昧。ウと進行形、エと受動態の区別がつかない。

⑤ 関係代名詞

whoやwhichやthat等がなぜ使われるのか、どういう意味(日本語)で使われるのかといった疑問をもつ。

⑥ theの使い方

「その」という表現と、それ以外の多岐にわたる使い方が漠然としていて分からない。世界でただ一つしかないものに付けるとして、the earth, the moon等の説明をした後、We all share this beautiful earth. という表現が出てくると混乱する。

⑦ よく似たつづり

work⇒walk / take⇒talk / want⇒went /
same⇒some / fast⇒first / well⇒will /
sing⇒song / then⇒than⇒them /
letter⇒later⇒little /
thought⇒through⇒though

⑧ よく似た意味

speak⇒tell⇒talk⇒say /
see⇒watch⇒look at / hear⇒listen to /
abroad⇒foreign /
for⇒during⇒between⇒among /
favorite⇒like / disease⇒sick

⑨ よく似た使い方

- ア go home (thereやhere)
- イ go to school (church / bedや固有名詞)
- ウ go to the library

⑩ 短縮形とよく似た単語

who's⇒whose / we'll⇒well / we're⇒were /
won't⇒want / there's⇒theirs

視覚的によく似ているものと、音声的に同じもの、似ているものがあるが、それらが区別できない。

⑪ 1998の読み方を書く

ナインティーン・ナインティエイトと書く。

⑫ Pardon?とI'm sorry, but I can't follow you.

話しかけられて分からなかったらPardon?と聞き返せばよいが、何回も英語で同じことを問われて、最後まで分からなかった時どうしたらよいかわからない。

(5) 発想

① 「ひとりっ子」の表現

I don't have any brothers (sisters). がすぐに出てこない。I have a brother (sister).と混乱する。

また、兄弟姉妹や家族のことをいう場合、have, hasを使った場合と There are ~を使った場合の数字の使い方が混乱する。

② Americaとthe United States

二つの違いが分からない。アメリカやイギリスということばを、もう一度考えてみるのが大切ではないか。

③ our (their) music teacher

ourやtheirにつられて、複数形だと思ってしまう。

④ "I'll take it. How much is it?"

かつて教科書に出てきた、ドレスを買いに来た客の言ったことばである。日本語訳にとらわれてしまい、話の流れにまで意識がまわらない。

(6) 教師や教材が起因する混乱

① 日本語訳の仕方

easy⇒「やさしい」⇒「親切な」つまりkindと同じような表現として捉えてしまう。

同様にsince⇒「～から」⇒from

② ing形、to-不定詞、和訳

それぞれingの形、toと動詞の原形、日本語訳という意味で、何の説明もなく突然教師が使うことばに混乱する。

③ Tom does not (=doesn't) come here.

()内の語が何を示すのかを、下線などを使って示されないと自信が持てない。

④ 導入の仕方

Which is longer V, A or B?

Which do you like better V, A or B?

AかBかと問う疑問文の比較級の後にthanをつける。

⑤ 文法用語の使い方

教師が使う日本語に文法用語が多すぎると、英語まで及ばない。(注1)

⑥ 教科名の書き方の説明

教科名はすべて大文字で始めるとしている。教科書によっては、なぜかすべて大文字で説明され、後に小さく「English, Japanese以外は、文中では小文字で書きます」という説明があり、余分な混乱をきたしている。

(7) コミュニケーションの手段としての英語

① 英語の長文

英語の長文を読むのに自信が持てない、避けたいと感じる。これは、多くの英語学習者に共通した課題である。

② 英語で表現

言いたいことを、既習事項を工夫したり変化させて使うことができない。日本語をそのまま英語に直そうとする。これについてはⅢ(4)で述べる。

③ 人との接し方

異なる文化を持つ人と接する場合に最低限必要なエチケット、マナーを確信しておらず、自信が持てない。ALTの質問に対し、近隣の友達と答えを相談し合う。又、「箸の使い方が上手ですね」と褒めことばのつもりで言う。なるべくALTとの接触を避けようとする。

④ 自分の考え

何を話すか、相手から何を知りたいか、自分の考えは現時点ではどうなのかをはっきり持てない。意見の対立を恐れる。意見対立後の、自分の意見の表明に自信がない。

⑤ 主張する人

自分の意見を主張する人に対して、「自信家」「でしゃばりな人」といった感情を抱きがち。

⑥ 曖昧

疑問点の表明をためらい、質問をせず曖昧なまま終わってしまう。自分の言ったことが理解されたと思っているALTは、後で非常に驚くことになる。

⑦ 恐れ

外国語を使う時の、文法や表現の間違いや発音の間違いを恐れる。裏を返せば、同じ外国語を学ぶ者同士の目、相手の目を気にする。その為、疑問点の表明をためらう。

⑧ 日本に氾濫する英語

必要以上に日常生活の中に英語を使う。また、それらが母国語である日本語より優位な位置づけであるかのような感覚を持つ。あるパン屋で売られている「りんごパイ」と「アップルパイ」では、

「アップルパイ」の方が20円高い。これに何の疑問も持たない。

⑨ 合衆国、ヨーロッパ優位

合衆国、ヨーロッパの人々の日本に対する批評、批判をそのまま受け入れてしまうだけで、相手との意見の交換をしない。日本人の発想について説明しようとしめない。母国に対して誇りが持てない。

Ⅲ. 指導上の注意点

Ⅱで挙げたそれぞれの点にどのように対処していくかといった、個々の対処法は別の機会に譲るとして、現在基本的に必要と考える何点かを下記に挙げる。

(1) 小学校のローマ字指導との関連

現在、小学校では4年生時に年間6時間のローマ字を学ぶ時間が計画されている(注2)。それ以降中学校に入学するまで、ローマ字を学習する時間は学習指導要領には設定されていない。学んだ方法や時間数によって、生徒の中には中学校に入学した時はほとんど忘れてしまい、思い出せない生徒も珍しくない。反対に定着がしっかりしている生徒で、英単語のスペルをローマ字式に覚え、書く時と読む時を区別している場合がある。

中学校では英語学習入門期に、ローマ字と英語の違いを説明しながら指導を進めていくが、小学校時代に習ったローマ字をある程度覚えていると、音声と文字、特に子音の発音の定着が早い。これを、中学校でゼロから始めなくてはならない場合、かなり遅れをとることになる。

自分の名前、住所、好きなタレント名等々、英語学習中にローマ字表記法は何度も必要になってくる。せめて自分の名前は書ける状態で英語学習にとりかかってほしいと願う。

以下は、平成8年度本校入学現中学3年生147名に実施したアンケートである。

ローマ字に関するアンケートと意識調査

このアンケートと意識調査は、みなさんの小学校でのローマ字の学習経験と中学校での英語学習との関連についての意見を知り、今後の英語指導に役立てたいという願いから行うものです。

考えていること、思うことを書いてください。1、4、5は全員が、2、3は選択して答えてください。

1：あなたは小学校の時のローマ字をどのくらい学びましたか。あなたが思う番号を○で囲んでください。

1 かなり時間を 使って習った 6%	2 ← 26%	3 43%	4 23%	5 全く習って いない 2%
-----------------------------	------------	----------	----------	-------------------------

2 : 1の質問で、1・2・3のどれかに○をつけた人にききます。中学校へ入学したとき、ローマ字を覚えていましたか。

1 ほとんど覚えていた 62%	2 ←	3	4 →	5 全く覚えていなかった 3%
	18%	15%	2%	

3 : 1の質問で4・5のどちらかに○をつけた人にききます。中学校で英語を学習するとき、ローマ字を(あまり)習っていないことへの不安がありましたか。

1 大変あった 3%	2 ←	3	4 →	5 まったくなかった 55%
	6%	17%	19%	

4 : 英語を学習する上で、小学校の時のローマ字の学習は必要だと思いますか。

1 大変思う 22%	2 ←	3	4 →	5 まったく思わない 7%
	31%	28%	12%	

5 : 4について、具体的なあなたの意見、考えを書いてください。

賛成…単語を覚えやすい。英語を理解しやすい。英語と関連がある。名前などを書く時役立つ。安心して英語の授業に臨める。一般常識。英語をやっていく上で基礎となる。何となく英語の発音分かる。
 反対…英語の発音と違う。英単語をローマ字読みしてしまう。英単語を覚えにくい。英語を習った時に混乱してしまう。英語とローマ字の違いをはっきり知っておかないと分からなくなる。小学校での学習に差がついていると中学校へ入ってから困る。なぜローマ字を学ぶのか教えてほしかった。本当の英語を学ぶためには不要。

本校の中学3年生147名にとったアンケートでは半数以上の生徒が、小学校でのローマ字指導の大切さを感じている。反面、その必要を覚えない生徒はその理由として、英語とローマ字の音声上の違いの難しさを指摘している。英語学習初期の段階でもっと分かりやすい音声に関する説明がなされたら、ローマ字指導は英語学習を進める上で一層効果を上げられる。

また、ローマ字を小学校でほとんど学んでいない生徒が約4分の1にのぼった。中学校の英語教員がそうであるように、小学校の先生にもローマ字指導が不要だと考えている方がかなりあると耳にする。中には、ローマ字指導はほとんどされない方があるようだ。アンケートの結果を見ても、実際ローマ字を

学んだ経験がまったくない、思い出せない、という生徒もかなりいる。反対に、多くの時間をかけて学んできたと考える生徒も多い。こうした異なる経験を持つ生徒が、1つの教室でスタートを切らなくてはならない。

小学校での学習が定められている以上、最低限の指導は行ってほしい。それをもとに中学校の指導は始まるのである。また、せっかく学んだローマ字が十分に生きる英語の指導を、中学校も工夫していく必要を痛感する。

(2) 日本語と英語の音声やリズムの違い

小学校によってローマ字の定着が一定していない生徒がいるため、まずは子音の音について説明する。次に子音と母音(ア、イ、ウ、エ、オ)のそれぞれの音とその成り立ちを説明し、単語の説明に入る。特に子音のf, v, r, l, thは日本語にない音である。これまでに経験したことのない唇や下の動かし方、呼吸の仕方が必要となる。また、fとh、bとv、rとl、sとth、zとthの区別も難しい。実際に何度も発音し、読み、聞き、その違いを身体で覚えていく必要がある。

アルファベットや単語を発音する場合、

- ① 一拍で
- ② 最後の音程を下げる
- ③ 子音を重視する

文章を読む場合、原則として

- ① 一つの文はリズムをつけ、一息で読む
- 音声学習のまとめとして詩の朗読や暗唱を行うと効果的である。(注3)

母音の音の説明に関しては、これからの課題である。

※音の成り立ち

	a	i	u	e	o
b	ba	bi	bu	be	bo
d	da	di	du	de	do
f	fa	fi	fu	fe	fo
g	ga	gi	gu	ge	go
h	ha	hi	hu	he	ho
j	ja	ji	ju	je	jo
k	ka	ki	ku	ke	ko
l	la	li	lu	le	lo
m	ma	mi	mu	me	mo
n	na	ni	nu	ne	no
p	pa	pi	pu	pe	po
r	ra	ri	ru	re	ro
s	sa	si	su	se	so
t	ta	ti	tu	te	to
v	va	vi	vu	ve	vo
w	wa	wi	wu	we	wo
y	ya	yi	yu	ye	yo
z	za	zi	zu	ze	zo
ch	cha	chi	chu	che	cho
sh	sha	shi	shu	she	sho
th	tha	thi	thu	the	tho

※単語と発音

b	bag	bed	box	boy	big
d	dish	desk	dog	door	
f	fish	fork	fast		
g	go				
h	hat	hand	have	horse	
j	jam	Japan	Japanese		
k	king				
l	lily	lemon	blue	black	
m	map	man	mitt	morning	
n	no	notebook			
p	pen	pencil	park	piano	
r	racket	rose	red		
s	six	seven			
t	tennis	ten			
v	very				
w	watch	window	well		
y	yes	yellow			
ch	chair	chess	watch		
sh	short				
th	that	this	think	third	

※文の練習 (注4)

- ① It is me.
- ② I am here.
- ③ He will go.
- ④ He and I will go.
- ⑤ This is a man.
- ⑥ Give it to me.
- ⑦ Peter painted a picture.
- ⑧ "Good morning, Mother," said Mary.
- ⑨ The girl goes to the garden gate.
- ⑩ Her hat is in her hand.
- ⑪ Carl came in the car today.
- ⑫ He is taking this hat off his head.
- ⑬ Cathy, why didn't you show up yesterday?
- ⑭ Do you think we can have our picnic on Thursday?
- ⑮ Do you know where the other girls are?
- ⑯ Her bird was hurt when the cage turned over.
- ⑰ Once there were little Indians who lived in a small tipi.

※リズムとイントネーションの練習

- ① I like cats.
- ② I like to skate.
- ③ She studies very hard.
- ④ They usually walk.

- ⑤ You must write it neatly.
- ⑥ The movie was interesting.
- ⑦ They are practicing it.
- ⑧ I bought a fine sewing machine.
- ⑨ The dress has many buttons on it.
- ⑩ What is David Parker?

(3) 動詞を重視した指導

英語では主語と動詞の関係が大切である。主語、動詞とは何かの説明から始め、時には形容詞や副詞の説明もするが、かつて、同僚の国語教師から、日本語の文法との混乱を避けるため、「英語学習における文法用語の説明」ということを予め生徒にしっかり了解させた上でやってほしいといわれたことがある。

主語…「～は、が」にあたることば

動詞…ウ段で終わる

動作、動きを表す

特に、教科書に出てくる動詞はその都度書き出させ、将来～ingや過去、過去分詞の変化を学習する時、再度確認し、変化表を完成させる。Be動詞、一般動詞を1年生の初期から意識させると、I am not like fish.やMy doesn't mother play drum.やI play ski.といった間違いが激減する。

動詞の変化表 No.3

No.	原形	原形	過去	過去分詞	～ing
42	join	～に参加する	joined		joining
43	sit	～に座る	sat		sitting
44	stand	立つ	stood		standing
45	ski	スキーをする	skied		skiing
46	skate	スケートをする	skated		skating
47	practice	練習する	practiced		practicing
48	talk	話をする	talked		talking
49	paint	～を塗る(色を塗る)	painted		painting
50	keep	～を続ける、持つ	kept		keeping
51	drink	～を飲む	drank		drinking
52	blow	吹く	blew		blowing
53	give	～をやる	gave		giving
54	cook	～を調理する	cooked		cooking
55	watch	～を観る	watched		watching
56	understand	～を理解する	understood		understanding
57	visit	～を訪ねる、訪問する	visited		visiting
58	shout	叫ぶ	shouted		shouting
59	train	訓練する	trained		training
60	notice	～に気がつく	noticed		noticing
61	sleep	眠る	slept		sleeping
62	think	思う、考える	thought		thinking
63	spend	～を過ごす、費やす	spent		spending



(4) 既習事項の工夫

Ⅱ⑦については、事例を挙げ、言い換えの方法を機会ある毎に説明していくことのでかなりの成果を上

げることができる。本校では、授業の始めに生徒が一人ずつ交替でスピーチを行い、それに対する質疑応答を行っている。英語の表現がなかなか出てこない場合、全員で考える機会を持っている。

- ① さ来週テニスの試合があります。
⇒〇月〇日にテニスの試合があります。
- ② テニスを始めてどのくらいになりますか。
⇒いつテニスを始めたのですか。
- ③ 小学校6年の時です。
⇒約3年前です。
- ④ テニスの試合、がんばってね。
⇒あなたがテニスの試合で勝つように願っています。
- ⑤ あなたの学校は創立何年目ですか。
⇒あなたの学校は何歳ですか。
いかに既習事項を工夫して自分が表現したいことを表すか、その工夫の仕方に習熟させることはコミュニケーション能力の育成に大きく関わってくる。

2. 終わりに

義務教育を終えた中学生は様々な進路へ歩んでいく。中学校卒業後も英語を学び続ける生徒は100%に近い。その時、中学校でどの程度、何を学んできたかが大きくものをいう。それぞれの先生によって方針は異なるだろう。しかし、自分が教えたことが過去から未来へどうつながるのかを冷静に見つめることは、生徒への礼儀だと考える。小学校、中学校、高等学校の先生方がもっと連携し合い、協力し合ったら生徒の伸びは大幅に広がると確信する。

Ⅱ(7)③～Ⅱ(7)⑨は今後に残された私自身の課題といえる。教える側の教師は果たしてこの問題を自分自身の問題としてすべて解決しているだろうか。仕事柄ある程度外国語で意志の疎通が可能な私自身を振り返ったとき、胸を張って肯定できる項目が非常に少ないことを痛感する。では、その原因は…？

英語を教える立場として社会に出て20年近く経とうとしている。幸いにも、異なった文化を持つ多くの人に出会い、外国を訪れる機会もかなり与えられた。それを重ねるうち、一つの大きな疑問が生まれた。「日本で英語を教える立場にある『教師』として自分の英語圏での存在意義はどこにあるのか、英語圏へ置かれた場合、自分はこの英語を使って何ができるのか」と。そして、この疑問を解決しようとした時「Ⅱ(7)③～Ⅱ(7)⑨の自分自身への解答が強烈な意味を持つてくるのだ」と気付いた。

世界の中の自分を意識した時、自ずとすべきことが見えてくる。それを具体化し、少しでも、日本で英語を学ぶ生徒たちに伝えていけたらと感じている。

参 考 文 献

- ・高橋正夫(1991)『身近な話題を英語で表現する指導』大修館書店
 - ・中津療子(1995)『An Analysis of Two Types of Cultures』東京未来塾
 - ・南大阪地区発音研究会(1988)『実習の手引』
 - ・若林俊輔(1990)『英語の素朴な疑問に答える36章』ジャパントイムズ
- (注1)『英語の素朴な疑問に答える36章』ジャパントイムズ198ページ～199ページによれば、財団法人語学研究所は、「中学校における文法用語」として、以下の用語を挙げている。

《中学校用語54》

文・否定文・疑問文・命令文・感嘆文・文型・主語・目的語・品詞・語・単語・語尾・名詞・固有名詞・数えられる名詞・数えられない名詞・単数(形)・複数(形)・1人称・2人称・3人称・主格・所有格・目的格・代名詞・動詞・活用・Be動詞・助動詞・形容詞・副詞・前置詞・接続詞・疑問詞・関係代名詞・先行詞・原形・現在形・過去形・進行形・現在進行形・過去進行形・完了形・現在完了形・受け身形・過去分詞・-ing形・原級・比較級・最上級・句・名詞用法・形容詞用法・副詞用法

(注2)「小学校学習指導要領 国語科」

(注3) Mother Gooseの中のRhymesやJoyce KilmerのTreesなど。

(注4)(注5)『実習の手引』南大阪地区発音研究会15ページ～19ページを引用

(さいとう たかこ・英語科)

e-mailアドレス

t-saito@edu.shimane-u.ac.jp

